

『中国民話と日本—アジアの物語の原郷を求めて』

立石 展大

日本における中国口承文芸研究を長く支

えてきた飯倉氏の研究書である。南方熊楠

研究で多くの著作と成果を残した飯倉氏

は、一方で中国口承文芸の研究者としても

知られていた。その研究の道筋を、本書に

おいてたどることができる。本学会で会長

を務められたこともある飯倉氏は、本書出

版の翌月に逝去された。飯倉氏の最後の仕

事になった本書には、中国昔話・伝説・こ

とわざに関する考察はもちろん、日本のこ

れまでの中国口承文芸研究の歩みと、今後

の課題も示されている。

本書は次の五部で構成されている。

〔Ⅰ 孟姜女民話の生成〕

〔Ⅱ 中国民話と日本〕

〔Ⅲ 中国民話の世界〕

〔Ⅳ 中国の『現代民話』〕

〔Ⅴ 研究回想〕

本書の特徴としては、まず、中国で広く

伝えられている昔話や伝説を分析している

点が挙げられる。〔Ⅰ 孟姜女民話の生成〕

は、タイトルにあるとおり「孟姜女伝説」

についての論文である。この伝説は、いわ

ゆる「四大伝説」の一つで「七夕伝説」

「白蛇伝」「梁山伯と祝英台」と並んで有名

である。どの伝説も男女の仲をテーマにし

ており、愛し合う二人が社会や家族によっ

て引き裂かれる悲恋の色彩が強い。漢籍に

も確認でき、長い時代にわたり民衆の中で

語り伝えられてきた伝説である。

〔Ⅰ 孟姜女民話の生成〕は、「孟姜女に

ついて—ある中国民話の変遷」と「孟姜女

民話の原型」の二編から成り立っている。

初出は前者が一九五八年、後者が一九六一

年である。本書巻末の初出一覧を見れば分

かるが、他の三〇編の初出は一九八〇年代

の後半から二〇〇〇年初頭である。特に

一九九〇年代に中国関係の論文が集中して

いる。他と比べて孟姜女関係の論文が突出

して早いのは、飯倉氏の卒業論文が基に

なっているためである。一九五八年一月に

提出された卒業論文の要約が、岩波書店の

『文学』（一九五八年八月号）に載せられた。

「孟姜女伝説」はいわば、飯倉氏の研究の

出発点ともいえるテーマであった。もっと

も飯倉氏にとっては「大学には働きながら

通っていたので、卒業さえできればいいと

思っていた。卒論を書きあげて、それで中

国文学との別れの記念にしたいという気持

ちであった」（三二九頁）ということであ

る。この卒論が中国文学者の竹内好氏の目

に留まり、竹内氏の推薦で『文学』に載る

ことになった。これだけでも、論文の水準

の高さが推し量られる。竹内氏の当時の日

記には「稀有の力作」と書かれていたとい

う。(三一九頁)

「孟姜女伝説」の骨子は次のようである。「孟姜女の夫が、万里の長城築城のために徴集され、孟姜女が夫に冬着を作って届けに行く。しかし、夫は亡くなつていて、万里の長城に埋められている。孟姜女の慟哭で万里の長城の一角が崩れる」

飯倉氏は、慟哭で長城を崩した記載が現れる六朝末期から唐代にかけてを、この伝説が成立した時期と考え、それ以前を基となる伝説が流布した時期として、話の変遷を明らかにした。

この論文が執筆された当時は、日中国交正常化以前である。まして、中国の口承文芸資料もまだ少なかった時代に「孟姜女伝説」に取り組むのだから、現代中国で収集された資料を使うことは難しい。検証されている資料は漢籍が中心であり、漢籍をたどって、孟姜女伝説の成立過程を探る手法がとられている。始めは、夫が戦死しても礼を知る妻として登場する女性（春秋左氏伝『礼記』）に、痛哭することで城を崩すエピソードが加わり（『列女伝』）、そし

てその城が長城として語られる（『同賢記』）と話を変遷した。これに冬着を届ける（敦煌変文）話が付け加わるというように丁寧な孟姜女伝説の形成を示している。

「Ⅱ 中国民話と日本」は「竜の子太郎」のふるさと「中国の狐と日本の狐」「中国の『三大童話』と日本」「董永型天女説話の伝承と沖繩の昔話」の四編で構成されている。

このうち最初の二編は、研究ノートのな色彩が強い。それぞれ中国の竜と狐が日本の伝承へどのような影響を与えてきたかを見通す内容となっており、今後の研究へのヒントを提示している。例えば「治水伝承にかかわる竜は、山を切り開き、川を掘りすすめる雄々しさを備えていると同時に、なぜか悲しい運命を背負ったものとして語られている。何に由来するかは分からないが、それは日本にも共通する性格であるらしい」（八九頁）と日中の竜の共通性を挙げる。また、狐にまつわる日本の伝統的な文芸や慣用語、ことわざを踏まえて「日本

の狐のイメージの基本的なものは、ほとんど中国に由来するように思える。とすれば日本人は、狐を目前にしなから、それを非現実的な架空の動物に近いものとしてしか理解できなかったのだろうか。それとも、それだけ中国のイメージが強烈であったのか。（九八頁）と問題提起している。両編とも九十頁ほどで注もない。その分、竜や狐の伝承を大掴みに把握できるようになっている。示された課題は、後進が引き継いで考察するものとなる。

「中国の『三大童話』と日本」の「三大童話」は飯倉氏が名付けたもので、「虎のおばあさん」「虎の精」「蛇の婿」の話を指す。いずれも中国で広く語られる昔話であり「虎のおばあさん」は日本の「天道さん金の鎖」との繋がりをもち、「虎の精」は後半に日本の「狼蟹合戦」の仇討モチーフ（ATU210）を語る。そして、「蛇の精」は、蛇の精と幸せな結婚をした妹が嫉妬した姉に殺されるも、転生してよみがえる話である。前半部分は、「娘の親が蛇と約束を交わすことにより、妹が嫁入りをする」日本

の「蛇婿入り」に通じ、後半は「鬼婿入り」や「三つのオレンジ」と同様のモチーフを語る。本論では、この三話がどのように日本と繋がっているかの見通しを示している。実は、「虎のおばあさん」と「虎の精」について、飯倉氏は本学会誌『口承文芸研究』一六号に「中国の人を食う妖怪と日本の山姥―逃走譚にみる両者の対応」を寄せて論じている。ただ、本書には内容が重複するために収録されなかった。個人的には残念なことで、本学会誌に載せられた論文

では両話の話題分析が丹念に行われ、日本の「天道さん金の鎖」や「猿蟹合戦」との共通性を考察するうえでも欠かせない論文となっている。中国の「虎のおばあさん」では五一話を分析し、「虎の精」では三十一話を分析している。執筆は一九九三年。中国の昔話資料が増えつつあると言っても十分でない時期に、これほどの話を収集した。さらに構成要素表の作成で整理しており、飯倉氏の緻密な仕事ぶりがわかる。より詳細に分析されているこの論文のほうを収録しなかったのは、読みやすさを考慮したた

めであろうか。本書全体の印象からすると、日本と中国の口承文芸の繋がりのグラウンドデザインを描くためのようにも思える。「董永型天女説話の伝承と沖繩の昔話」は、本書の中核をなす考察である。本書における本格的な論文は前述の孟姜女についてと、この董永についてである。董永の話は、親に孝を尽くす董永のもとに天から神女が降りてくるのが骨子となっている。漢代にはすでに知られていたらしいこの話は、唐代くらいまでに「父の葬儀のために董永が奴隷となる約束で借金をする。その後、織女が現れて董永を助けて借金を返し、天へ戻る」という内容になってくる。そして、さらに時代が下ると語り物や演劇などの民間芸能の題材ともなる。口承でも広く語り継がれており、本論において特に華南の少数民族を中心に飯倉氏が分析をしている。その分析をもとに「もともと華北を中心としていた漢族が織女の伝承を取り入れて作り出した董永の説話は、華南の少数民族や漢族の語る天人女房の説話と結びつくことで、董永型説話のより豊かな説話群の

一つとして生まれ変わったことになる。」少数民族の側から見ると、自分たちの親しんできた『天人女房』の説話が、董永という固有名詞とそれにもなう脚色を受けて里帰りをしたことになる」（一四四―一四五頁）と見通しを立てた。漢族と少数民族の交流が一方的でなく双方向であり、互いに影響しあいながら口承の世界を作り上げてきた一例として、この話が位置付けられた。一方、沖繩で語り伝えられている「天人女房（七つ星由来）」は、およそ以下のとおりである。「親の葬式のために、金持ちに借金をして奉公している男のもとに女が来る。女の姉妹も手伝って機織りをすることで借金を返し、二人の間に三、四人の子供もできる。庭で遊ぶ時には北斗七星の中の星がないことを話すなど、女が男に言っていたが、男がその約束を破ったので女は天に帰ろうとする。しかし羽衣が見つからない。末の子の唄で、倉の中に羽衣があることを知った女は、末の子を抱いて天に帰る。それで北斗七星の二番目の星の横に小さな星がある」この冒頭は、董永の話

であり、星の由来へと展開する。中国において「星の由来に結び付く董永の話」は、飯倉氏の調べでは海南島のリー族のみだが、この話は女が天に帰らない結末である。沖繩の話と直接には結びつかないが、飯倉氏は今後の調査で近い構造の話が出てくる可能性は大きいとした。実際、四川省のイ族の伝承に「天女が天に帰り、子どもも北斗七星の横の小さな星になる董永型の話」（陳慶浩・王秋桂編『中国民間故事全集 一六 四川民間故事集二』「北斗七星的故事」一九八九年 遠流出版）があることを評者も確認しているので、飯倉氏の説は的を射ているだろう。

「Ⅲ 中国民話の世界」は「ある悲恋心中譚の系譜」「中国民話掌編」「ことわざの本」「周作人と柳田国男」の四編で構成されている。「ある悲恋心中譚の系譜」は「梁山伯と祝英台」を軸に、華南の悲恋話を横断的に見ていく内容である。「梁山伯と祝英台」は、亡くなった梁山伯の墓に祝英台が入って「後追い心中」する結末だが、こ

の「後追い心中」モチーフは漢族においてあまり一般的でない。むしろ華南の少数民族において濃厚に伝承されていることから「私の仮説は、これは漢族が長江の沿岸一帯に南下してきた時期に、そこに居住していた少数民族の伝承を、漢族が受け入れて自分たちの流儀で作りかえたものではないか、ということである」（一六三頁）としている。漢族と少数民族の交流によって話が生まれてくるのは、前述の董永と同様であり、本書において飯倉氏が中国口承文芸を分析するときの一つの切り口になっている。多民族国家の中国を理解する際に欠かせない視点が提示されている。

「中国民話掌編」は、「鬼」や「牛の皮一枚の土地」の話、「こんな晩」の話、土地陥没説話、「夢」、「ウサギと亀の競争」などが、日本との繋がりを軸に解説されている。「掌編」というタイトルどおり簡潔にまとめられていて読みやすい。「ことわざの本」は、一九〇〇年代初頭を中心として主に日本人が編集した中国のことわざの本の紹介である。日本が台湾を

統治していた時代に出版された台湾の俚談集や、満州事変へ向かう時勢において出版された北京官話の俚談集などの解題となっている。緊張した時代に出版された書籍の中で、飯倉氏は特に人々の生活に根差したことわざをピクチャップして紹介している。

本書は、これ以後、近代中国の研究者や近代日中間係にまつわる伝説・世間話を中心とする。「周作人と柳田国男」は、近代中国の口承文芸研究史である。

「Ⅳ 中国の『現代民話』」は、「中国の現代民話に見る日本」「台湾の民話・民謡集」に見える『日本』」「中国『東北』をめぐる民間伝承」の三編で構成されている。この三編の共通テーマは、中国において日本がどのように語られているかである。徐福や仏教、倭寇討伐に関わる伝説もあるが、近代以降の抗日運動に関する話にかなりの紙幅が割かれている。台湾と満州国における伝承を取り上げている点からも、近代以降の日中間係に飯倉氏が関心を寄せて研究テーマとしていたことがうかがえる。

「V 研究回想」は、日本における中国口承文芸研究史を見ていく際に、欠かせない内容となっている。李福清氏・鍾敬文氏・大林太良氏・伊藤清司氏との交流が語られ、『中国民話集』出版の裏話や「中国民話の会」の歴史が紹介されている。日本における中国口承文芸研究を牽引したのは、「中国民話の会」であった。二〇一一年に解散したこの会は、四五年にわたって活動を行い、その活動の中心に飯倉氏がいた。「中国民話の会」の活動史は、まさに日本の中国口承文芸研究史となる。

そして、飯倉氏の一般向けの大きな仕事といえば、『中国民話集』（一九九三年 岩波文庫）の出版だろう。中国の漢族が伝える昔話を紹介し、巻末で各話ごとに解説をつけている。中国の昔話に興味を持った一般の人がまず手に取るだろうこの文庫本が、飯倉氏によって書かれたことは幸いだったと思う。日本語訳された中国昔話事典がない現状、この本から中国昔話を理解する人が多いはずだからである。いわば、

一般の日本人が中国昔話を知るときの入口の役割である。収録されている四四話に なされた各解説は、実質的に事典の役割も果たしている。話型分析はもちろん、先行研究や伝承状況も盛り込まれた解説であるので、私も中国昔話に興味を持つ学生に対して、最初に読むことを勧めている。本編には、この『中国民話集』編纂経緯が載せられ、飯倉氏の口承文芸理解をうかがうう えでも面白い。書名も当初は『漢族昔話集』がふさわしいと考えていたが、岩波文庫のほかの民話集との兼ね合いでかなわなかったことや『漢族笑話集』と『漢族伝説集』も編んで全三冊にしたいという構想もあったとのこと（三四〇～三四一頁）が述べられている。また「この民話集の仕事で、いちばん面倒であったのは訳す話を選ぶことと、注釈を書くための調査であった。一つの話の翻訳と注釈をやるためには、一つの論文を書くような手順が必要であった」（三四〇頁）とあり、各話の解説が非常に丁寧におこなわれていたことに納得する。

中国の口承文芸の世界は豊かすぎて、その総体を理解するのは容易でない。中国で出版された昔話や伝説の事典も数冊あるが、いずれも内容に物足りなさが残る。ましてや、日本との繋がりでいえば研究途上であり、課題も山積みである。本書は、時に一つの話について深く掘り下げて、時代ごとの話の変遷を解き明かし、現代の話の伝播状況にまで視野を広げていく。また、日中両国の話の繋がりの大枠を提示して、課題を明らかにしている。中国口承文芸を広く見渡してきた飯倉氏の見識の深さがなせる業であろう。

二〇一九年六月 勉誠出版刊
本体八〇〇円
（たていし・のぶあつ／高千穂大学）